

特集

名古屋大学医学部附属病院アレルギー疾患治療チーム 5 年間の活動

若原 恵子* 石井 誠**

はじめに

名古屋大学医学部附属病院では「アレルギー疾患対策基本指針」に基づき、2018年6月に診療科・職種横断的なアレルギー疾患治療チームを設置し、活動を始めた。チームリーダー、呼吸器内科、小児科、皮膚科、眼科、耳鼻いんこう科の各医師、アレルギー疾患に関する専門的知識を有する看護師、薬剤師、管理栄養士、事務担当者からなる10~12名で構成され、①難治性アレルギー疾患等患者に対する複数診療科の連携による治療体制の確立、②難治性アレルギー疾患等患者、その家族及び地域住民に対する情報提供体制の構築、③難治性アレルギー疾患等の治療、その療養環境に関する研究会等の人材育成に関する企画立案、④難治性アレルギー疾患等の治療にかかる臨床研究の推進、⑤難治性アレルギー疾患等の治療に関する外部機関への支援をその目的として掲げている。今回5年間の活動を振り返る機会をいただいたので、チーム設置以降、継続的に院内で行ってきたアレルギー勉強会を中心に報告したい。

— Key words —

アレルギー疾患対策基本指針, アレルギー疾患治療チーム, アナフィラキシー

* Keiko Wakahara : 名古屋大学大学院医学系研究科 呼吸器内科 講師

** Makoto Ishii : 名古屋大学大学院医学系研究科 呼吸器内科 教授

I. アレルギー勉強会の開催内容と参加人数, 参加職種

アレルギー疾患治療チーム設立後、その主な活動として院内でアレルギー勉強会を開始した。現在までの勉強会の開催内容、講師、参加人数を表1に示す。開始当初は手探りで、各診療科で扱うアレルギー疾患の勉強から始め、メンバーの得意分野や、アンケート調査のニーズをみながら演題を選出してきた。勉強会についての認知度は次第に上がり、参加人数、参加職種も回数を重ねるごとに増加、多様化している。特に、2020年度以降、COVID-19の感染症対策のためにe-learningを採用したが、これが功を奏し、最近では400名以上の職員の参加がみられている。

図1には、2019年度以降に開催された勉強会の参加者職種をまとめた。看護部の取り組みもあり、一貫して看護師の参加率が高く、2022年度では、看護師の参加が全体の79.1%となった。次いで、医師、薬剤師の順であるが、少数ではあるものの管理栄養士、診療放射線技師、臨床検査技師、理学療法士、精神保健福祉士、臨床工学技士、視能訓練士、臨床研究コーディネーターなど様々なメディカルスタッフが参加しているという点は注目に値する。

II. アレルギー勉強会アンケート結果から

勉強会のさらなる充実を目指し、2020年以降は参加者にアンケート調査を行い、勉強会のブ

表1 アレルギー勉強会の演題と参加人数

年度	回数	開催日	場所	演題	担当科	講師	参加人数
2018年度	第1回	2019年3月4日(月) 17:30~18:30	病棟8階 大会議室	アレルギー性鼻炎 と副鼻腔炎	耳鼻いんこう科	寺西 正明	不明
				アレルギー性結膜 炎の種類と対策	眼科	安間 哲宏	
				気管支喘息の最新 治療	呼吸器内科	若原 恵子	
2019年度	第2回	2019年11月26日(火) 17:30~18:30	病棟8階 大会議室	アトピー性皮膚炎	皮膚科	棚橋 華奈	39名
	第3回	2020年2月4日(火) 17:30~18:30	鶴友会館2階 会議室	皮膚スキンケア・ 皮膚トラブル	看護部	太田 佳奈子	
	第4回	2021年2月1日(月)~ 3月1日(月) WEB(楽々てすと君)	WEB(楽々てすと君)による開催	アレルギー性鼻炎 について	耳鼻いんこう科	寺西 正明	404名
				食物アレルギーの 患者プロフィール 登録と食事オー ダー	栄養管理部	田中 文彦	
2021年度	第5回	2022年2月7日(月)~ 3月7日(月) WEB(楽々てすと君) による開催	WEB(楽々てすと君)	薬剤アレルギー	皮膚科	棚橋 華奈	448名
				アナフィラキシー	救急科	後藤 緑	
2022年度	第6回	2023年3月6日(月)~ 3月24日(金) WEB(楽々てすと君) による開催	WEB(楽々てすと君)	食物アレルギー	あいち小児保健医 療総合センター アレルギー科	松井 照明	411名
				アナフィラキシー	救急科	山本 尚範	

ラッシュアップを重ねてきた。アンケートでは、勉強会や講義の内容について概ね好評をいただいております。我々スタッフも大いに励まされることとなっている。「今後希望する講義内容について」のアンケート結果を表2に示す。薬剤アレルギーや、アナフィラキシーなど実際の臨床現場で遭遇する可能性が高い項目と、疾患各論に対する希望が多いという特徴がみうけられた。詳細では、特に医師から造影剤アレルギーや、薬剤アレルギー、整形外科や歯科医師から金属アレルギーについての講義の希望などが目立ち、日常診療に直結しながら、系統的な勉強が難しい分野の需要が浮き彫りになった。また、生

物学的製剤を始めとした治療薬のアップデートにも一定のニーズが見受けられた。

Ⅲ. アナフィラキシーショックについて

アレルギー疾患の中でも生命に直結し、治療や検査に関連して起こる可能性があり、メディカルスタッフの迅速な対応が必要な病態にアナフィラキシーショックがある。より多くのスタッフに病態や対応を知っていただくため、2019年度に初めてアナフィラキシーショックについての講義を取り入れた。救急科の先生に当院で経験した症例や、日本アレルギー学会発刊のアナフィラキシーガイドラインをふまえた、実際に

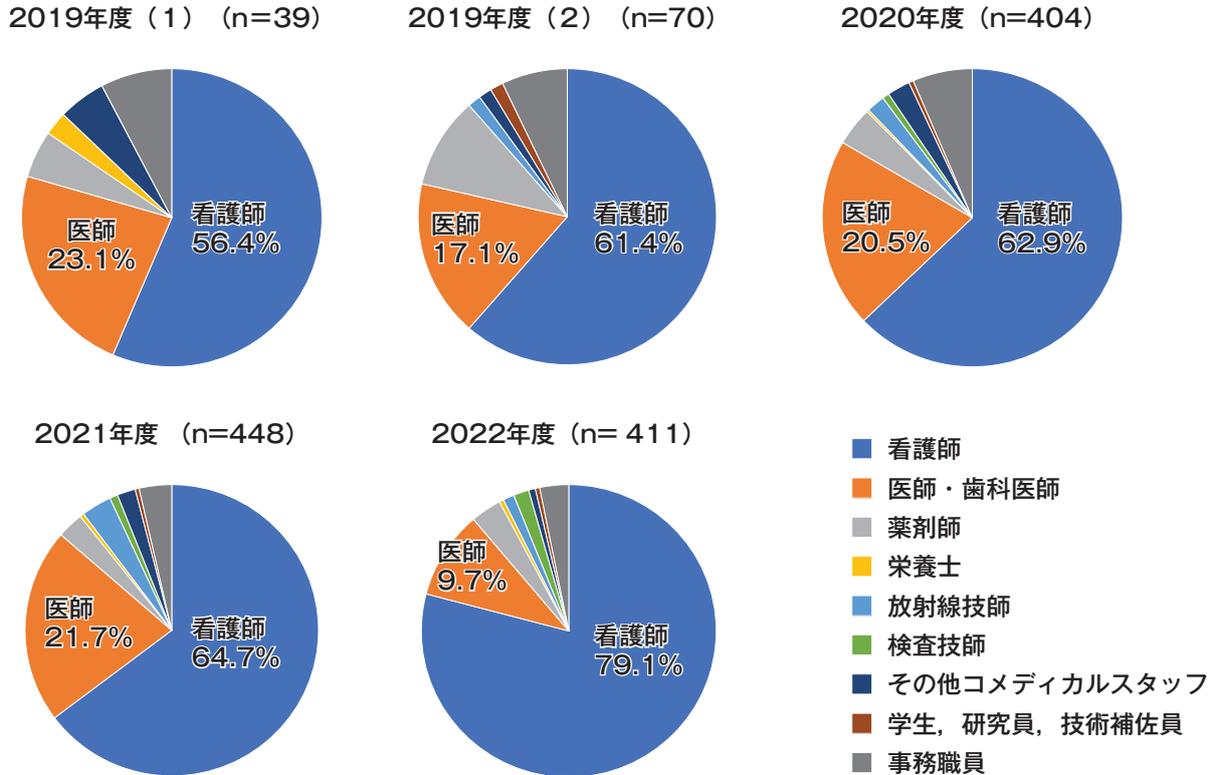


図1 アレルギー勉強会参加者職種

表2 今後アレルギー勉強会で希望する講義内容

講義内容	人数(人)
薬剤アレルギー (造影剤, 麻酔薬を含む)・輸血関連アレルギー	16
アレルギー疾患各論(アトピー性皮膚炎, 花粉症, 喘息, 食物アレルギー, 金属アレルギー, 寒暖差アレルギー, ヒスタミン中毒など)	16
アナフィラキシー	8
アレルギー治療	5
アレルギー検査	2
その他	2

即した対応についての講義をお願いし、毎回大変好評で、繰り返し講義をして欲しいという希望も強い。2020年度の2月の勉強会では、「アナフィラキシー患者の対応をした経験があるか?」「ポケットマニュアル(当院で作成し医療スタッ

フが携帯している)にアナフィラキシーのフローチャートがあることを知っているか?」の2点についてアンケート調査を行った。58名の回答者のうち、全体として47%のスタッフがアナフィラキシー患者の対応をしたことがあると答え(医

師の78%、看護師の45%、薬剤師の29%が対応経験ありと回答)、66%がポケットマニュアルにアナフィラキシーのフローチャートがあることを知っていると答えた(医師の78%、看護師の60%、薬剤師の86%、診療放射線技師の100%が知っていると回答)。以後、勉強会の回数を重ね、また新型コロナウイルスワクチンの副反応であるアナフィラキシーショック対応の重要性が社会的にも注目され、スタッフの疾患への認知度や関心はさらに高まっていることが期待される。

一方で、当院では患者安全推進部の指導のもと、インシデントレポート(ヒヤリ・ハット事例など医療事故に関連、あるいはこれにつながる事例の報告)が集積され、定期的な解析がなされている。アレルギー関連のインシデントの中では、やはりアナフィラキシーショック関連の事例が多く、カルテ記載不足・認識不足などによるインシデントも一定数認められている。今後は予防できる可能性があるアナフィラキシーショックを未然に防ぐための啓発活動も重要であると考えている。

IV. その他の活動と今後の展望

アレルギー疾患治療チーム、愛知県アレルギー拠点病院としての活動を通して、これまで臓器特異的疾患として取り扱ってきたアレルギー疾患を、横断的な側面からとらえなおす機会を得た。実際、チームの活動を通して、他診療科での診療・治療実態についてお互いが認識できるようになり、診療科をまたいだ勉強会の開催なども始まった。一方、この5年間は、COVID-19により通常業務の縮小が余儀なくされ、チームの活動も少なからず制約をうけた。5年前に掲げた目標の達成には道半ばではあるが、今後も少しずつでも確実に、院内のアレルギー診療レベルの向上がなされることを期待している。最後に、アレルギー疾患治療チームの皆様、会議の準備や書類作成、アンケート結果のまとめ等にご尽力いただいた事務スタッフの皆様、我々の活動にご理解、ご協力いただいた病院執行部並びに講師の先生方に深謝申し上げ、稿を終えたい。

利益相反

本論文に関して筆者(ら)に開示すべきCOI状態はない。